

知ることから関心へ 関心から行動へ 私たちの暮らしと未来をつなぐ「SDGs」

生活者研究センター

「SDGs(エスディーゼーズ)」とは、2015年9月の国連サミットにおいて、日本を含む193の加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための目標(Sustainable Development Goals)」の略称です。気候変動の深刻化、飢餓、環境、格差の拡大など多くの山積みの問題を前に、このままでは環境も社会も経済も立ち行かなくなり、この地球を次世代へつないでいくことができなくなる、という強い危機感を世界の人々が共有したことから生まれた目標です。地球上に生きるすべての人の未来に深く関わる「SDGs」について、生活者の現在の意識実態と行動、これからへのおもいを報告します。

- 未来を変える「SDGs」、日本での認知度はまだ低い
- 環境問題に対する意識と行動の変遷
- 関心度は高くても、貢献したい割合は低い傾向
- 日常の何気ない体験や気づきが、SDGsへの関心の芽生えに
- 暮らしの中でSDGsに関心を持ち、自分にできることから始める

【調査概要】

「環境・SDGsについての意識実態調査」

調査期間：2018年7～8月
 調査方法：郵送調査
 調査対象：首都圏在住20代以上男女
 回答者数：男性206人、女性478人

調査期間：2019年2～4月
 調査方法：家庭訪問インタビュー
 調査対象：首都圏在住30～60代既婚女性
 対象者数：9人

「生活者の暮らしに関わる意識と行動調査」

調査期間：2008年、2010年、2011年、2012年、
 2014年、2016年、2018年(いずれも9月)
 調査方法：インターネット調査、郵送調査
 調査対象：首都圏在住20～70代男女
 回答者数：2008年* 男性 540人 女性 1,195人
 2010年 男性 1,742人 女性 1,992人
 2011年* 男性 755人 女性 760人
 2012年 男性 1,725人 女性 1,784人
 2014年 男性 1,672人 女性 1,771人
 2016年 男性 1,683人 女性 1,774人
 2018年 男性 1,876人 女性 1,930人

* 2008年、2011年の調査対象は首都圏在住20～60代男女

未来を変える「SDGs」、日本での認知度はまだ低い

2015年9月の国連サミットにおいて採択された「SDGs」は、貧困や飢餓問題、健康と教育、格差、不平等、安全な水の確保、エネルギー、働きがい、産業・経済成長、環境、気候変動、世界のパートナーシップなどについて、多岐に渡る17の目標(図1)と具体的な169のターゲットを掲げています。「SDGs」の目標は、これまで成し得なかった「誰ひとり取り残さない」世界をつくるという力強い理念のもと、地球上のすべての人がより幸せになる未来を目指しています。目標達成のゴールは2030年。今現在、国の内外で国や企業、NPO、個人による取り組みが広がりつつありますが、日本でのSDGsの認知度はまだ低いのが現状です。「SDGsという言葉聞いたことがある」と答えたのは、わずか19%(男性23%、女性14%)*でした。

※出典:2019年2月SDGs認知度調査<朝日新聞社調べ> ▶ https://miraimedia.asahi.com/sdgs_survey04/



(図1)SDGsの17の目標

環境問題に対する意識と行動の変遷

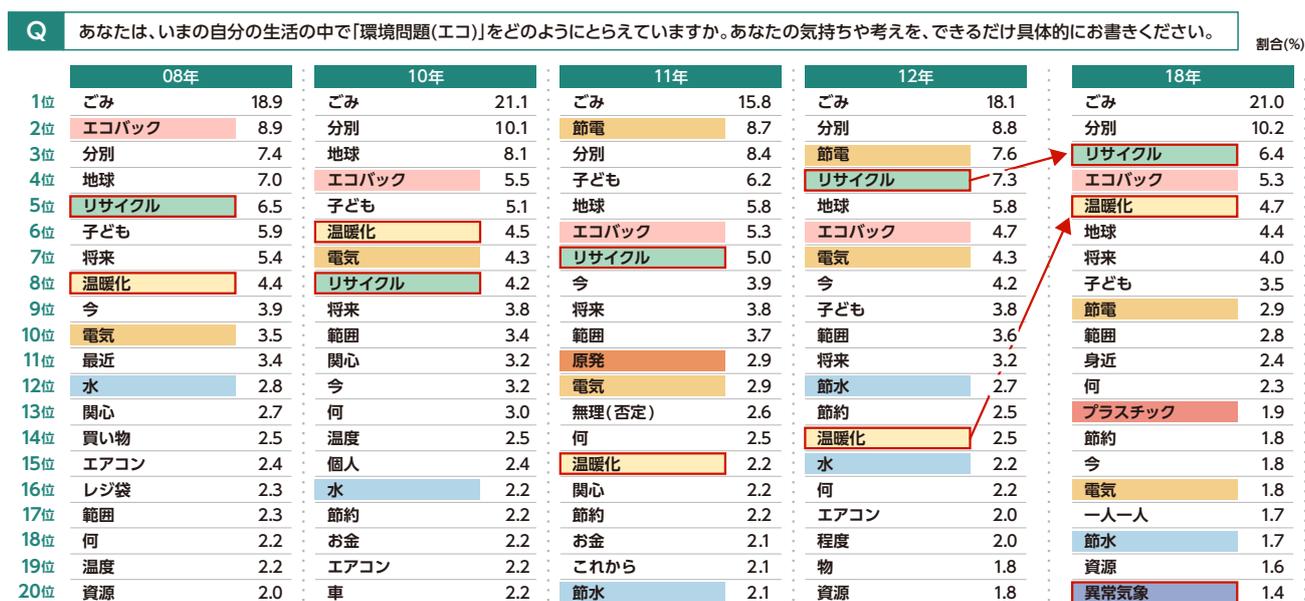
2015年のSDGsの採択以前の日本では、地球温暖化防止対策の枠組みを取り決めた2005年の京都議定書発効、環境・気候変動などを中心に議論された2008年の洞爺湖サミット開催などを経て、暮らしの中の「環境問題(エコ)」への関心が高まりました(図2)。2011年の東日本大震災後は計画停電や政府からの節電要請などの呼びかけもあり、「節電・節水」意識も広がりました。その後も節電やごみの分別、詰め替え品の利用などの行動は定着しています(くらしの現場レポート:2018年6月「行動は定着・マナー化 効果を実感し環境・エコに“より前向き”に」より)。



(図2) 社会の動きと気象トピックス

また、この10数年間に起きた日本各地での豪雨、猛暑、豪雪などの異常気象による深刻な災害への危機感などを背景に、生活者の「環境問題(エコ)」の捉え方にも変化がみられ、自由回答の単語ランキングでも、温暖化や気候変動に関連した単語が上位にくるようになりました(図3)。また、2018年の夏に「マイクロプラスチック」と呼ばれる微小のプラスチックごみによる海洋汚染への問題意識が高まり、プラスチック製ストローを紙製に切替える取り組みが欧米を中心に広まると、日本でもプラスチックごみへの関心に高まりが見られ、単語ランキングにも「プラスチック」が入りました。

日本ではSDGsという言葉の認知度は低い現状ですが、「環境問題(エコ)」については、ニュースなどの情報に接することで、多くの人が温暖化やプラスチックごみにも関心を持つようになり、自分ごととして考え始めている様子が見えられます。



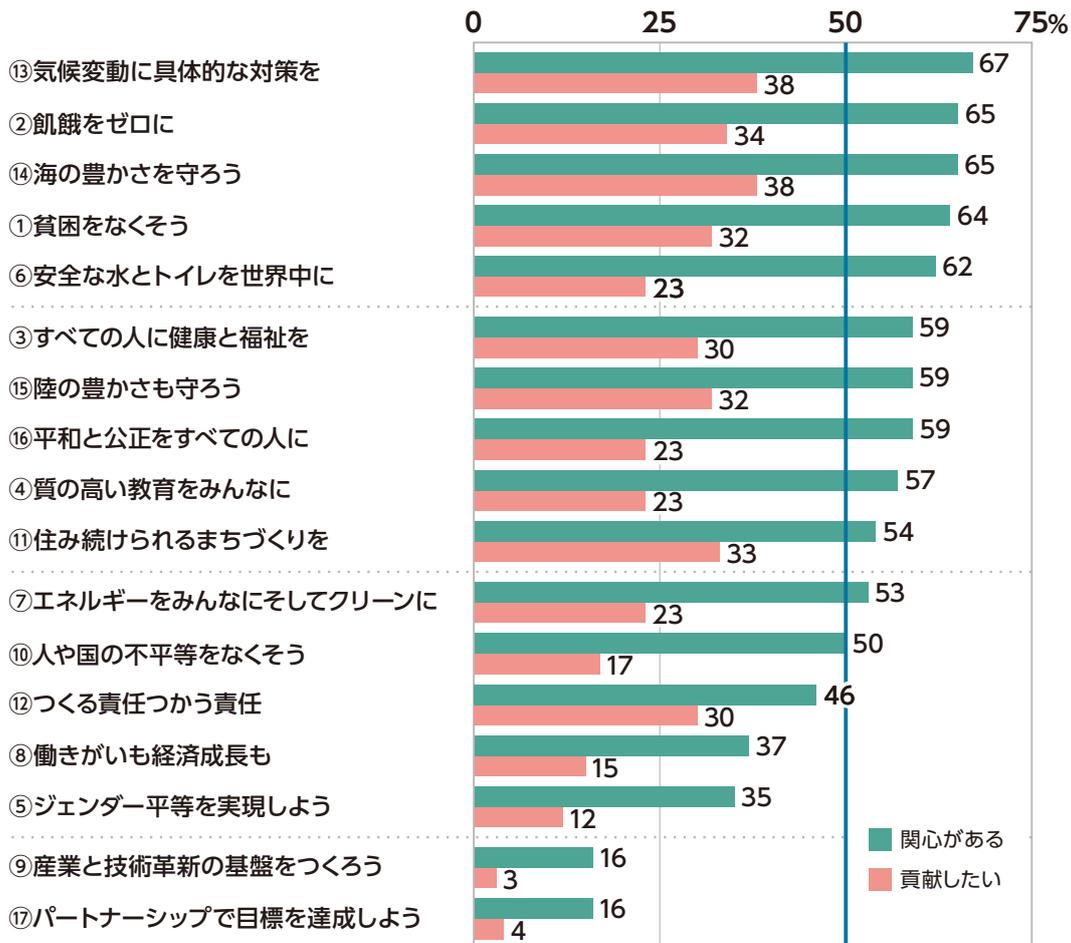
※環境・エコ・問題・自分・人 除く ※turerellerによる単語ランキング

20~60代既婚女性(花王 生活者研究センター調べ)

(図3) 環境問題(エコ)の捉え方の推移

関心度は高くても、貢献したい割合は低い傾向

環境を意識した行動が定着しているなか、実際に既婚女性に17の目標を具体的に提示してみると、「関心がある」と答えた割合が50%を超えた目標は12ありました(図4)。なかでも、『⑬気候変動に具体的な対策を』(67%)が最も高く、次いで『②飢餓をゼロに』(65%)、『⑭海の豊かさを守ろう』(65%)、『①貧困をなくそう』(64%)、『⑥安全な水とトイレを世界中に』(62%)と続き、環境や人道的な目標への関心が高いことがわかりました。一方で、『⑤ジェンダー平等を実現しよう』(35%)、『⑨産業と技術革新の基盤をつくろう』(16%)、『⑰パートナーシップで目標を達成しよう』(16%)などの関心度は低く、目標によって偏りがみられました。また、「今後貢献したい」と答えた割合が50%を超えた目標はなく、関心度に比べると全般的に低い傾向でした。目標自体に関心はあっても、「自分の負担になるような貢献は無理」、「何をすれば貢献できるかわからない」といった戸惑いの声も聞かれました。



首都圏在住20~70代既婚女性 370人(複数回答) (2018年)
(花王 生活者研究センター調べ)

(図4)SDGs(持続可能な開発目標)の各目標への関心と貢献意識

日常の何気ない体験や気づきが、SDGsへの関心の芽生えに

訪問インタビューからは、貢献したいと思うようになったきっかけや、さまざまなおもいを聞くことができました。例えば『⑬気候変動に具体的な対策を』については、「猛暑や異常気象による災害増加などへの危機感から、これまで温暖化対策として取り組んでいた節電やごみの分別に、より積極的になった」という声が聞かれました。また、日本で暮らしていると意識しにくい『②飢餓をゼロに』、『⑥安全な水とトイレを世界中に』といった目標についても、日常の何気ない体験や気づきから関心が芽生え、「これから自分に何ができるか考えたい」と意識が変化したり、あるいは行動へとつながっている様子が見受けられました。

自分の暮らしにも必要、無理のない範囲で



Aさん(36歳)
育休中
・夫
・長男(小2)
・長女(2歳)
・次女(4ヶ月)

貢献したい目標



おもい・行動

- ・夫婦とも実家が遠く、3人育児をしている私も助けが欲しいし、子ども達のためにも社会全体が変わらないと。
- ・インドの最下層カーストの子どもの貧困をなんとかしたい。教育・福祉でできることをしたい。
- ・夫が自然エネルギーに興味があった。節電、車のアイドリングストップも気を付けているが、10年で費用が回収できるならと、屋根に太陽光発電パネルを設置した。

経験や自分が大切にしたいおもいから



Bさん(65歳)
パート
・夫
・長男(26歳)
・長女(24歳)

貢献したい目標



おもい・行動

- ・NHKラジオで生前整理の話聞き、これからの生き方を考えるように。生協の利用で貯めたポイントを寄付したり、海外の水やトイレのためのカンパ金も送っている。
- ・子どもの頃からちゃんと教育を受けられれば、飢餓・貧困から救われると思う。知り合いが手伝う子ども食堂に食材を提供したい。
- ・介護の仕事をしているが、仕事の合い間に話し相手をしてあげる時間がない。母の介護が終わったら、高齢者の「傾聴ボランティア」をしたい。

小さい頃の思い出や、ちょっとした気づきから



Cさん(44歳)
 自営手伝い
 ・夫
 ・長男(小2)
 ・次男(6歳)

貢献したい目標



おもい・行動

- 実家の父が廃材を棚等にリメイクする人で、壊れたから捨てるのには私も罪悪感がある。無駄な物を買わないようにしているし、不用になったらメルカリに出す。発送する時も、環境問題を考えて梱包は最小限にしている。
- 夫の実家の離島の海で泳いだときに、海外から流れてくるプラごみの多さにショック。非力だけど「ごみをポイ捨てさせない」「ごみ拾い」を子どもや周りの人に伝えている。

アルバイトや子どもの頃の宿題での記憶から



Dさん(35歳)
 専業主婦
 ・夫
 ・長男(3歳)

貢献したい目標



おもい・行動

- コンビニでアルバイトをしていたときに、毎回食べ物が大量廃棄され、何も口にできない人もいるのにと捨てる度に罪悪感だった。だから、生ごみも肥料に変えたりしてみたい。
- お味噌汁1杯を排水口に流すと、キレイにするのに浴槽1杯の水が必要という小学生の頃にやった課題を、すごく覚えている。モノや資源も無駄なく使うよう意識したい。つい使い過ぎちゃう食器洗い洗剤も量を減らしたい。

暮らしの中でSDGsに関心を持ち、 自分にできることから始める

SDGsが目指す、世界のすべての人々に関わる多くの深刻な問題を2030年までに解決することは、壮大かつ達成も難しい目標です。調査からは、SDGsという言葉は知らなくても、17の目標それぞれに対する人々のおもいや関心を持つきっかけがみえてきました。日本に住んでいると意識しにくい目標でも、日常の何気ない体験や気づきから関心が芽生え、意識を変化させたり、自分にもできる行動に気づき始めている様子も見受けられました。17の目標に関心を持つことは、まずは大切な第一歩です。私たちの日々の暮らしの中には、少し見直すだけで、目標に貢献できる行動がいろいろあります。

参考)持続可能な社会のために

ナマケモノにもできるアクションガイド(国連広報センター)

▶ https://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/24082/

行動を変えた結果が目に見えるのは10年先、あるいはもっと先かもしれません。しかし、子どもや次世代に暮らしやすい世界を残すために、一人ひとりがSDGsの理解を深め、身近な社会課題に関心を持ち、自分にできることから始めていくことが大事であると考えます。

●お問い合わせ・ご意見は **花王株式会社 生活者研究センター**

〒131-8501 東京都墨田区文花 2-1-3 TEL. 03-5630-9963(月～金 9:00～17:00) FAX. 03-5630-9584

くらしの研究 www.kao.co.jp/lifei/

※掲載の記事・写真の無断掲載・複写を禁じます。